

Title	沖縄舞踊の歴史的背景について (その2)
Sub Title	Historical background of Okinawan dances (II)
Author	清水, 富士子(Shimizu, Fujiko)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	1984
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.24, No.1 (1984. 12) ,p.29- 40
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00240001-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

沖縄舞踊の歴史的背景について

(その2)

清水 富士子*

1. は じ め
2. 江 戸 上 り
3. 「おもろ」から三味線音楽へ
4. 琉歌の成立と特質
5. む す び

1. は じ め

琉球の歴史については前回でも述べたごとく、「孤島苦、宿命の歴史」という伊波普猷氏⁽²⁾の説が、まさに適切な表現としての歴史観であろう。

琉球は四面海にかこまれた孤島国家⁽³⁾であり、毎年おそってくる颱風と旱魃に苦しめられ、飢饉のことを餓死と称しているさまは、いかに孤島苦にあえいでいたかがよくわかる。

又、日支両属という変則的な地位、つまり、中国皇帝の冊封を受けながら、鹿児島からの指令⁽⁴⁾によって動く傀儡政権であり、第二次大戦後は日米両属という立場に追いこまれ、常に二つの強国の間に介在するという苦悩は、琉球の宿命以外なものでもなかったのである。

尚真王が平和国家としての琉球を宣揚し、武備撤廃、戦争放棄を宣言したのは15世紀の初めであり、日本では応仁の乱から戦国時代に入ろうという頃である。

尚真王は中央集権⁽⁵⁾を完成し、殉死⁽⁶⁾を禁止している。

琉球の財政は古くから海外貿易に依存してきたので、日本から中国、朝鮮はもちろん、シャムからジャワ、スマトラまで貿易船が行き、その頃の琉球は大した産物もなかったので、すべて中継貿易であった。

当時の那覇港は、中国や日本、あるいは南洋諸国の商人が集まり、物資の集散がさかんな国際都市であった。その貿易による利潤は大きく、琉球の財政は豊かになり、後年、日本政府によって指定された23件の国宝建造物のうち、その大部分は、当時建てられた宮殿や寺院であ

* 慶應義塾大学体育研究所専任講師

る。

琉球人は外国人に対して常に誠実であり、貿易にあたりお互いの善意を大切にしている。それは「貿易によりお互いに欲しいものが手に入る。何を好んで血を流す戦争の必要があるのか」という当時の琉球人の思想であり、この考えが、尚真王の武備撤廃の動機であり、地上の平和を願った英断であった。

しかし、琉球の海外貿易による利潤に垂涎していた薩摩は、武備なき琉球を知っており、慶長14年（尚真王が国内から武器撤廃をしてから約1世紀後）、薩摩は琉球に対し大島五島（奄美、喜界、徳之島、沖永良部、与論）の割譲を求めて、それが入れられないとただちに兵を送って琉球を攻撃している。

薩摩軍は琉球の北部、運天港に上陸すると、まるで無人の島に行くように、途中の宮殿や寺院を焼きはらいながら南下してきている。

当時首里に滞在していた泉州界の僧、喜安は、その日記に、「昔より此の国は弓矢という名をだも聞かず、夢にも知られざる故也。⁽⁷⁾ 聞得大君御殿、仙福庵、⁽⁸⁾ 豊美城の宿所、みな灰燼の地とぞなりにける。その外の民屋は記するに及ばず、家々の日記、代々の文書、七珍万宝さながら失せ果つ」と被害のようすを嘆いている。掠奪をしたばかりか、貴重な記録類を集めて火をかけている。

この理由なき戦争で、（慶長以前の）琉球の貴重な文献や、古文書、書画や、工芸品、その他の文化財が、ほとんど失なわれたことはまことに残念なことである。

それから300年間、明治12年の廃藩置県まで、琉球には薩摩による圧政が続いたのである。

前回は「舞踊の発生」、「おもろ」、「組踊りの成立」、「玉城朝薫と組踊り」を歴史的背景について考察したが、今回は引続きその2として、「江戸上り」、「おもろから三味線音楽へ」、「琉歌の成立」について諸文献を参考にしてみとめたものである。

注（1） 清水富士子：沖縄舞踊の歴史的背景について（その1）、慶應義塾大学体育研究所紀要23.1、昭和58年。

（2） 伊波普猷全集 第1巻、平凡社、昭和55年。

（3） 前掲(2)書、479頁。

（4） 前掲(1)書、39頁注12。

（5） 前掲(2)書、436頁～438頁。

（6） 前掲(2)書、439頁～440頁。

（7） 山里永吉：沖縄歴史物語、勁草書房、156頁～160頁、昭和57年。

（8） 下中邦彦：風土記日本 第1巻、平凡社、271頁、昭和50年。

（9） 前掲(1)書。

2. 江戸上り

日本と琉球との関係のいわば公的な歴史というべきものは、徳川幕府の時代になってからのことだといってよい。すなわち薩摩の島津家久の手によって行われた慶長14年の「琉球入り」以来のこととみるべきであろう。

徳川時代を通じて琉球は、徳川將軍の代替りごとに賀慶使をたてて新將軍を慶賀し、また、自国の国王の即位ごとに恩謝使をたてて謝恩することを例とした。この一行の来朝が「江戸上⁽¹⁰⁾り」である。

その目的は、薩摩の琉球侵略にあり、薩摩が幕府の「御威光」を背景に行った幕藩体制内の歴史的事実である。侵略目的を端的にあげれば、(1) 琉球を属領とすることによって、異国支配者としての権威を天下に誇示すること。(2) 日明貿易復活の仲介の労を琉球にとらしめるところにあった。この二つの目的から発した象徴的な臣従儀礼が「江戸上り」の実態である。

寛永11年の賀慶使、正保元年の恩謝使以来、嘉永3年まで200年余の間にあわせて18回が記録されている。

使者の選定にあたっては人格、識見ともに高く、自己の職掌についての知識と処理能力に優れた人物が選ばれた。⁽¹²⁾ また使者たちは、私的な場において大名家臣や文人などに接し、詩文の唱和、和歌の贈答、席書の懇請、芸能の鑑賞を行うこともあったので、豊かな教養の所持を要求されたのである。

使者の構成は正使、副使、讃議官、楽正、儀衛正、掌翰使、楽師、楽童子、であり、時代によって多少の変化はみられる。⁽¹³⁾

準備としては、江戸上りの目的が日本の附庸国たる異国王の聘礼にあったから、何事も異国風たること、つまり、具体的には唐風たることが薩摩の指示により強要されている。⁽¹³⁾

唐風礼式第一主義は、儀仗、致敬礼、言語、服装、音楽、献上品などに及んでいるが、その実際についての指導はかなりきびしいようすがうかがわれる。そのうえ、鹿児島及び江戸の薩摩邸や、時には沿道諸大名の懇望によって琉球音楽や舞踊を演ずることもあったので、それにも熟達していなければならなかった。教授も唐芸能と琉球芸能とにわかれていたようである。

「江戸上り」といえば、進見の儀（御礼の儀、引見の儀などともいう）、奏楽の儀、辞見の儀（御暇の儀）が三大大行事とされる。⁽¹⁴⁾

奏楽の儀における音楽には、路次楽と座楽の二種があり、この楽人の構成は、楽正、儀衛正、楽師、楽童子、路次楽人から構成されていた。その中の楽正というのは、楽師、楽童子の

沖縄舞踊の歴史的背景について（その2）

奏する御座楽唐歌の頭役（座楽奉行）であり、芸能家系の⁽¹⁰⁾もので、王府の踊奉行を輩出したような家のものが選ばれている。

1714年（正徳4）、座楽主取兼通事として参府した琉球戯作の祖、玉城親雲上朝薫は、琉球社会の伝統的芸能と、家系上における芸能的素質が、後世にまで残る偉大な功績を作り上げた彼を育て上げたのであろう。1718年（享保3）御冠船のための踊奉行に任ぜられ、琉球で初めて組踊⁽¹¹⁾りを作り、翌年冊封使を前に上演している。朝薫の子、奥平親雲上朝喜は、1738年（元文3）、南風之御殿で能6曲を舞って尚敬王の観賞に供しており、孫、奥平親雲上朝義が曲舞能楽を学んでいる。このことは、やはり玉城家の芸能的素質を示すものであろうかと思われる。

前回でも述べたが、ここで玉城朝薫の事に少し触れてみると、彼は生来芸能にすぐれ、沖縄固有の音曲や舞踊はもとより、この頃士族階級の中にさかんだった能も奥義を極め、さらに20歳のとき尚美里王子に随行して薩摩に行ったのをはじめ、首里王府の役人として本土の芸能をつぶさに見ている。これらの江戸行き、薩摩行きは半年～1年もの長い滞在なので、能や歌舞伎などを充分研究する事が出来たのである。したがって、江戸上りによる本土芸能習得の機会を得たことは、琉球芸能、特に舞踊への影響は強く、大きなものであったと思われる。

江戸上りに関する史料は数多くあるが、所在上から幕府関係、薩摩関係、琉球関係、その他に分類することができる。⁽¹²⁾主たるものをいくつか取り上げてみると、1. 通航一覧・通航一覧続輯、2. 御触書集成、3. 徳川実紀・続徳川実紀、4. 柳営日記、5. 御徒方万年紀、6. 薩藩旧記雑録、7. 家譜、8. 行列記、などがある。

前にも述べたが、中国文化圏に属する琉球であったから漢詩や書道に秀でた者が多かったが、その一方では日本文化、特に和歌についての関心も高く、その結果が琉球文化に対する日本人の関心を高め、琉球についての著作や刊行物が出るようになったのである。そして江戸上りの使者たちが受けた日本文化の影響の大きさ、内容の豊かさは測り知ることのできないものである。そこで琉球文化は固有性に富んでいるといわれながらも、異質性にも満ちているのは、琉球の置かれている位置からくる外交活動の側面の姿であろうかと思われる。

注 (10) 宮城栄昌：琉球使者の江戸上り，第一書房，1頁，昭和57年。

(11) 前掲(10)書，22頁。

(12)(13) 前掲(10)書，35頁～64頁。

(14) 前掲(10)書，101頁～136頁。

(15) 沖縄文化協会：沖縄の伝統文化，沖縄タイムス社，297頁～300頁，昭和50年。

(16) 前掲(1)書，39頁，注12。

(17) 前掲(1)書，39頁，注14。

(18) 芸能史研究会編：比較芸能論（日本の古典芸能10），平凡社，197頁～198頁，昭和54年。

(19) 前掲(1)書，40頁。

(20) 前掲(10)書，1頁～10頁。

3. 「おもろ」から三味線音楽へ

「おもろ²¹」とは沖縄、奄美の古歌謡で、これには創世紀や神への祈願、英雄の謳歌、航海を詠じたもの、戦士を鼓舞したものなどがあり、12世紀頃より17世紀初めにかけてうたわれた歌謡である。(古いものは6世紀頃と思われるものもあるという。)

全22巻に収められた「おもろ双紙」は1553首で、原始宗教的感動がその中心をなしているとみられる。

「おもろ双紙」は、歌詞、歌唱、舞踊という三要素(即ち文学性・音楽性・舞踊性)が一体となった純粹の古代民謡であり、それぞれのおもろを生んだ社会を反映していると考えられる。その中には、えさおもろ、えとおもろ、こねりおもろ(巻九)、あすびおもろ(巻十二)がある。

えさおもろのえさということは、労働の動作の掛声から来たものらしく、集団労働の舞踊化がこのえさの起源ではないかと考えられる。後世のエイサー(盆踊歌)のようなものであると、「琉球歌謡史論」の中で世礼国男²²氏は述べている。

えとおもろのえとは、人が働く時、働きにつれて出す声や、詩う歌にも使われていたようだと伊波普猷氏は言っている。世礼国男氏はえとは俗歌である。つまり従来のおもろと形式のちがう新流行のうたの意味だと言っている。例えば船えとの中には、舟の進行に伴う律動的な動揺、それは波のうねりと櫓の操作によるものに分れてはいるが、その律動を基礎とするふしから出たようすは明瞭なことと思われる。

こねりおもろは、歌の行間に細字で舞いの手を註記してあり、恐らくこの時代までに出来ていた舞いの定型を集めたものであろう。

琉球舞踊はこのこねりおもろにある。おす手、拝み手をこね廻しておす手として差し出すこねり手、などを修飾したり、組み合わせたりして発達して行ったのである。

あすびおもろとは、神遊びの時のおもろと言われるが、神遊びとは何かと言うとこれはまだ明瞭にされていない。それは94首の内、神事とは全く関係のないもの、又遊びというと絃歌に合わせて舞い踊ることであるが、それとも関係のないものもある。しかし、多種多様なあそびという解釈ではどうであろうか。

いずれにしても双紙中のおもろは大層幅の広い概念で沖縄のあらゆる歌舞音楽・芸能・文学の母胎をなし、その間、社会構造の変化、新楽器の出現、外来文化(日・支・南方)の流入が激しかったことも記憶されなければならないと思う。

「おもろ双紙」の編集を企てた尚真王時代には、琉球王国の海外貿易は頂点に達しており、王府の船は日本、朝鮮、支那、南方諸国(安南、²³シャム、ジャワ等)を往来した。この貿易は王

沖縄舞踊の歴史的背景について(その2)

家の独占事業で、いわゆる中継貿易であったが、ポルトガル船の北上、ついで日本船の南下がはじまると、中継貿易の余地がなくなり、1570年代を境に幕を閉じている。この貿易の衰退とともに「おもろ」も影が薄くなり、やがて消滅していくのである。その消滅の一因とみられるのは、従来の鼓に代わる新しい楽器三味線の渡来である。

三味線の沖縄渡来については種々の説があるが、中国南部の福州、あるいは安南、シャム、ビルマなど、大陸から伝来したと推定されるだけで、いつ、誰によってもたらされたかは全くわからない。現在通説とされるのは、1392年、明の太祖が中山王察度の請いを入れて沖縄の風俗教化のために福州人三十六姓をおくった時、音楽好きの福州人が、太祖の定めた音楽礼法に則り、これに必要な三味線を輸入したものであろうという説と、別に三十六姓は胡弓、月琴、明笛、蛇皮線のような楽器をもち込み、この中の蛇皮線が一たん本土へ渡って本土で改良されてから、さらに沖縄へ逆輸入され、独特の発達をしたものであろうという説もある。

察度王時代に三味線が伝わったとして、これが急速に普及発達したであろうことは疑いのないところだが、注目すべきは、それから三味線ならびに三呼線音楽について推測しうる何らの記録もないままに第二尚真王時代となるのである。その伝来の時期はともかくとして、従来あった楽器、単調な鼓にとって変わり、歌の伴奏用として上層、下層を問わず歓迎され、急速に普及するにつれて「おもろ」のような自由型の長詩よりも、定型で短くまとまった思想を表現しうる和歌のようなものが要求されるようになったのである。

ここに八・八・八・六の三十音による琉歌発生の基盤がつくられたのである。

とにかく15,6世紀には三味線の伝来とあいまって、各地方の民謡がさかんにうたわれていた。そして尚巴志の三山統一、尚真の中央集権化で、各地方の按司の首里集結による各地の歌曲の交流はさかんになり、音楽と舞踊の統一、向上をもたらしている。

注 21) 外間守善：沖縄文化論叢(4)，平凡社，247頁～273頁，昭和46年。

22) 前掲21)，249頁。

23) 川平朝申：沖縄の歴史，月刊沖縄社，80頁，昭和58年。

24) 川平朝申：沖縄の歌とおどり，月刊沖縄社，224頁，昭和57年。

25) 前掲23)書，40頁～42頁。

26) 前掲21)書，18頁～21頁。

27) 前掲(8)書，269頁。

28) 前掲(2)書，428頁～438頁。

4. 琉歌の成立と特質

沖縄の歴史で最も重大な事件といえ、なんといっても1909年の島津の侵入であろう。この

沖縄舞踊の歴史的背景について(その2)

時期を境とする以前と以後とでは、文化の上に大きな断層が感ぜられる。

それは島津侵入以前の資料が、「おもろ」や金石文⁽²⁹⁾以外はほとんど残っていないためとも考えられるが、やはり真実はこの事件を契機として、人情、風俗、言語までが大きく変化したためであろう。

たとえば、王室で編んだ「おもろ双紙」が現在解説するのに非常に困難をとまなうのは何故か。意味不明のことばも多く、発音も正しくはわからない。音楽も踊りもこれを知る手懸りはない、どのような時にどのような状態で歌われ、踊られていたかという、その環境や背景もほとんど知る術がない。王室で編集し保護した「おもろ」が、島津侵攻以後、文字だけを残して跡形もなく消え去ったということは、考えてみれば全く異常な出来事というべきである。島津の支配がそれ程徹底して、沖縄の文化を大きく変容させてしまったというほかはない。

「おもろ」の自由で明るい自然人の心からなる喜びや驚きは失せ、あとにはむせび泣くような琉歌⁽³⁰⁾が登場することになったのである。

琉歌は前にも述べたが、八・八・八・六という韻律をふくむ30字⁽³¹⁾からなる定型詩である。「おもろ」の自由律に比べると、規模も小さく力も弱い。どんなに華やかで、どんなにうれしい歌でも琉歌の形式をとると、なんとなく女性的な柔らかさと弱さを伴ってくる。かつて「おもろ」においてのびのびと歌ったあの解放的で男性的な行動性はみられないのである。

琉歌はよく日本本土の和歌にたとえられる。15世紀は沖縄で仏教のさかんな時代で、本土の学問の紹介者である仏僧は、和訓儒学とともに和文、和歌をも伝えている。この新しい文化の流入も、琉歌発生に何らかの作用を与えたものと思われる。

確かに形式の上からいっても三十一文字に対する三十文字であり、内容の上からいっても四季、恋、雑の歌というように分けられ、風流として文字にも書きあらわされたという点で、和歌と共通するものを持っている。

しかしその反面琉歌は、文字を持たない人の口にも三味線にのせて、音楽や踊りを伴うという点で、和歌よりもむしろ小唄や民謡に近い性格も合わせもっている。そして琉歌は文字文学としての一面を持っているとはいっても、その本質は、むしろ人々の苦しい生活の中から発せられるうめき声を音楽と踊りで表現する、いわゆる庶民の歌である。

ともかく政治変革で人心は萎縮し、悲調を帯びた歌曲となるが、やがて首里に湛水親方幸地⁽³²⁾賢忠(1623~1688)という人があらわれて古謡を復活し、また新しい明朗な曲をつくり、沖縄音楽の新しい型を打ちたてたといわれる。これがすなわち湛水流といわれるもので、慶長以後久しく荒廃していた音楽は再興されていくのである。

琉歌は自分の言葉に節をつけ、踊りで表現するという表現本来の様式が残っているように思われる。

沖縄舞踊の歴史的背景について(その2)

なお琉歌は島津侵攻以後に生じたため、大和歌の影響を受けたものも少なくない。

注 (29) 前掲(2)書, 115頁~116頁。

(30) 前掲(2)書, 48頁~50頁。

(31) 前掲(2)書, 46頁~47頁。

(32) 前掲(15)書, 81頁。

5. む す び

琉球人は、自らの手で自らの国家を経営し、優れた高い文化を持っていたのである。それがいったん他国の攻略を受け、他国の支配下に呻吟するようになると、文化は低調となり、独立自営の精神はだんだん稀薄となっていく。一つの民族にとって、自由の有無が、いかにその民族に影響していくかを、琉球の歴史は明白に示している。それは全く、三世紀にわたる長い歴史の重圧であった。しかしその間、常に平和への希望はすてなかったのである。それは15世紀末、すでに尚真王によって宣言された戦争放棄、武備撤廃の大理想である。それを国是として必死に守りつづけてきた琉球の伝統であり、その忍耐と意志の強さは歌と踊りの中に語られており、まことに興味深いものである。

日本、中国、南方との交易、そして江戸上り、冠船踊り⁽³³⁾という背景による影響は、文化芸能のあらゆる面で、それらの形を充分みることが出来る。特に舞踊に至っては、豊かな歴史的 content と、魅力あふれる情熱を強く感じ、今迄述べてきた歴史的背景を土台にして、次回は舞踊中心にとらえて行きたいと思う。

本稿は沖縄舞踊の歴史的背景(その2)として、主に、一大変革をもたらした島津氏琉球入りを中心に考察し述べたものである。

注 (33) 前掲(1)書, 39頁, 注12。

沖縄舞踊の歴史的背景について（その2）

（江戸上り）

回数	年次	〃	〃	使名	〃	〃	正使名	副使名
1	1634	(寛永 11)	謝恩使	(尚豊襲封)	佐敷王子朝益			
2	1644	(正保 元)	謝恩使	(尚賢襲封)	国頭王子正則			
3	1649	(慶安 2)	謝恩使	(尚質襲封)	具志川王子朝盈			
4	1653	(承応 2)	慶賀使	(家綱襲職)	国頭王子正則			
5	1671	(寛文 11)	謝恩使	(尚貞襲封)	金武王子朝興	越来親方朝誠		
6	1682	(天和 2)	慶賀使	(綱吉襲職)	名護王子朝元	恩納親方安治		
			慶賀使	(家宣襲職)	美里王子朝禎	富盛親方盛富		
7	1710	(宝永 7)	謝恩使	(尚益襲封)	豊見城王子朝匡	与座親方安好		
			慶賀使	(家継襲職)	与那城王子朝直	知念親方朝上		
8	1714	(正徳 4)	謝恩使	(尚敬襲封)	金武王子朝祐	勝連親方盛祐		
9	1718	(享保 3)	慶賀使	(吉宗襲職)	越来王子朝慶	西平親方朝叙		
10	1748	(寛延 元)	慶賀使	(家重襲職)	具志川王子朝利	与那原親方良暢		
11	1752	(宝暦 2)	謝恩使	(尚穆襲封)	今帰仁王子朝義	小波津親方安蔵		
12	1764	(明和 元)	慶賀使	(家治襲職)	読谷山王子朝恒	湧川親方朝喬		
13	1790	(寛政 2)	慶賀使	(家斉襲職)	宜野湾王子朝祥	幸地親方良篤		
14	1796	(寛政 8)	謝恩使	(尚温襲封)	大宜見王子朝規	安村親方良頭		
15	1806	(文化 3)	謝恩使	(尚灝襲封)	読谷山王子朝勅	小禄親方良和		
16	1832	(天保 3)	謝恩使	(尚育襲封)	豊見城王子朝典	沢岷親方安度		
17	1842	(天保 13)	慶賀使	(家慶襲職)	浦添王子朝熹	座喜味親方盛普		
18	1850	(嘉永 3)	謝恩使	(尚泰襲封)	玉川王子朝達	野村親方朝宜		

（注）宮城栄昌著「琉球使者の江戸上り」11頁～12頁

琉球歴史年表

時代	王統	国王	即位	薨去退位	シナ 曆		在位 年数	寿
					即位	薨去退位		
鎌倉	舜天王統	しゅん 舜 てん 天	西曆 (1187) 文治三	嘉禎三	(宋) 淳熙十四	嘉熙元	51	72
			源頼朝征夷大將軍となる（日）					
		しゅん 舜 ば 馬 じゅん 順 き 熙	曆 (1238) 仁元	宝治二	嘉熙二	淳祐八	11	64
倉	英	ぎ 義 ほん 本	建 (1249) 長元	正元元	淳祐九	宝祐七	11	不明
			饑饉となり、疫病が流行す、英祖に位をゆずり退位。（琉） 日蓮、鎌倉で説法をはじめ。（日）					
倉	英	えい 英 そ 祖	文 (1260) 応元	正安元	(南宋) 景定元	(元) 大徳三	40	72
			久米、慶良間、伊平屋の離島からはじめて入貢す。（琉） 元寇、元の使者を竜ノ口で斬る。（日）					

沖縄舞踊の歴史的背景について（その2）

時	代	祖	たい 大	せい 成	正	(1300) 安 二	延 慶 元	(元) 大 徳 四	至 大 元	9	62
		王	えい 英	じ 慈	延	(1309) 慶 二	正 和 二	至 大 二	皇 慶 二	5	46
	統	たま 玉	ぐ 城		正	(1314) 和 三	延 元 元	延 祐 元	至 元 二	23	41
					後醍醐天皇隠岐に流さる。楠木正成兵を挙ぐ。(日) 鎌倉幕府亡ぶ。足利尊氏天皇に反旗をひるがえす。						
	南	せい 西	い 威		延	(1337) 元 二	正 平 四	至 元 三	至 正 九	13	22
					尊氏將軍となる。北畠親房が「神皇正統記」を書く。(日)						
	北	察	さつ 察	と 度	正	(1350) 平 五	応 永 二	至 正 十	(明) 洪 武 二 十 八	46	75
					日本船鉄材をつんで牧港に入港。始めて中国に入貢す。(琉) 足利義満、室町に「花の御所」を営む。南北朝合体す。(日)						
室	王	ぶ 武	かい 寧		応	(1396) 永 三	同 十 二	(明) 洪 武 二 十 九	永 楽 三	10	不明
					義満、明に国書をおくって国交を求む。金閣寺建立。(日)						
	第	しょう 尚	し 思	しょう 紹	応	(1406) 永 十 三	同 二 十 八	永 楽 四	同 十 九	16	不明
					首里城の増築、国相懷機首里城外苑をつくる。(琉)						
		しょう 尚	はつ 巴	し 志	応	(1422) 永 二 十 九	永 享 十 一	永 楽 二 十	正 統 四	18	68
					全琉球の統一、那覇港を築港。(琉)						
		しょう 尚		ちゅう 忠	永	(1440) 享 十 二	文 安 元	正 統 五	同 九	5	42
					護佐丸中城を築く。(琉)						
町	尚	しょう 尚	し 思	たつ 達	文	(1445) 安 二	宝 徳 元	同 十	同 十 四	5	42
氏		しょう 尚	きん 金	ぶく 福	宝	(1450) 徳 二	享 徳 二	景 泰 元	同 四	4	56
					長虹堤を築く。(琉)						

沖縄舞踊の歴史的背景について(その2)

時	王	しょう 尚	たい 泰	きゅう 久	享 徳 (1454) 三	寛 正 元	同 五	天 順 四	7	46
		寺院を建て、巨鐘を铸造す。護佐丸の乱。(琉)								
	統	しょう 尚		とく 徳	寛 正 (1461) 二	文 明 元	天 順 五	成 化 五	9	29
		喜界島を討伐す。(琉) 応仁の乱。(日)								
	第	しょう 尚		えん 円	文 明 (1470) 二	同 八	成 化 六	同 十 二	7	62
		一休大徳寺の住職となる。(日)								
		しょう 尚	せん 宣	い 威	同 (1477) 九	同	同 十 三	同	1	48
		しょう 尚		しん 真	同 (1477) 九	大 永 六	同 十 三	嘉 靖 五	50	62
代	二	武器撤廃、殉死の禁止。円覚寺建立。玉陵を築く。(琉) 銀閣完成。(日)								
		しょう 尚		せい 清	大 永 (1527) 七	弘 治 元	嘉 靖 六	同 三 十 四	29	59
		「おもろさうし」の編集。(琉) ポルトガル人種子島に鉄砲を伝える。キリスト教の伝来。(日)								
		しょう 尚		げん 元	弘 治 (1556) 二	元 亀 三	同 三 十 五	隆 慶 六	17	45
	尚	桶狭間の合戦、川中島合戦。織田信長京都に入る。(日)								
		しょう 尚		えい 永	天 正 (1573) 元	同 十 六	万 曆 元	同 十 六	16	30
		守礼門に守礼之邦の扁額をかける。瓦奉行をおく。(琉) 信長安土に築城。信長本能寺で死す。(日)								
		しょう 尚		おい 寧	天 正 (1589) 十 七	元 和 六	万 曆 十 七	同 四 十 八	32	57
江	氏	僧袋中琉球神道記を著す、中国より甘藷伝来。薩摩の琉球攻略。初めて砂糖を製す。(琉) 秀吉の全国統一、家康征夷大將軍となり、江戸に幕府を開く。(日)								
		しょう 尚		ほう 豊	元 和 (1621) 七	寛 永 十 七	天 啓 元	崇 禎 十 三	20	51
		「おもろさうし」完成、薩摩より朝鮮人陶工を招聘。(琉) 家光將軍となる、島原の乱。(日)								
		しょう 尚		けい 賢	寛 永 (1641) 十 八	正 保 四	崇 禎 十 四	順 治 四	7	23
		日光東照宮完成。(日)								

沖縄舞踊の歴史的背景について（その2）

戸 王 統 代	しょう 尚	しつ 質	(1648) 慶安元	寛文八	順治五	(清) 康熙七	21	40
			羽地朝秀、「中山世鑑」を著す。(琉) 由比正雪の乱、江戸の大火。殉死の禁止。(日)					
	しょう 尚	てい 貞	(1669) 寛文九	宝永六	(清) 康熙八	同四十八	40	65
			孔子廟落成、「中山世譜」の編集、御茶屋御殿落成。(琉) 將軍綱吉生類あわれみ令を出す、赤穂浪士吉良を討つ。(日)					
	しょう 尚	えき 益	(1710) 宝永七	正徳二	康熙四十九	同五十一	3	35
			三味線主取をおく。(琉)					
	しょう 尚	い 敬	(1713) 正徳三	宝暦元	康熙五十二	乾隆十六	39	52
			玉城朝薫『組踊り』を創作す、蔡温三司官となる。(琉) 大岡忠相江戸奉行となる。初めて甘藷を小石川薬園に植える。(日)					
	しょう 尚	ぼく 穆	(1752) 宝暦二	寛政六	乾隆十七	同五十九	43	56
			宮古、八重山に津波襲来。(琉) 林子平「海国兵談」を著す。(日)					
しょう 尚	おん 温	(1795) 寛政七	享和二	同六十	嘉慶七	8	19	
		国学を首里に建つ。(琉) 伊能忠敬諸国を測量す。(日)						
しょう 尚	せい 成	(1803) 享和三	同	嘉慶八	同	1	4	
しょう 尚	こう 瀨	(1804) 文化元	文政十	同九	道光七	24	48	
		英艦アルセスト号、ライラ号来航、オランダ船来航。(琉) ドイツの医師シーボルト来日、間宮林蔵のカラフト探検。(日)						
しょう 尚	いく 育	(1828) 文政十一	弘化四	道光八	同二十七	20	35	
		英仏の船舶しきりに来航、英人宣教師ベッテルハイム来る。(琉) 天保の饑饉、大塩平八郎の乱。(日)						
しょう 尚	たい 泰	(1848) 嘉永元	明治十二	同二十八	光緒五	32	59	
		廃藩置県、沖縄県となる。(琉)						

(注)山里永吉「沖縄歴史物語」363～369頁。